日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集　2009.9.20-22　　PC 080

大学・教育現場往還型教員養成の教育効果

○宮本正一(miyamoto@gifu-u.ac.jp)
(岐阜大学教育学部)

key words: 教育養成、教師力、効果測定

I. 目的

教師の実践力を高める目的で、大学の教員養成学部において大学と教育現場とを往還する教員養成カリキュラムが編成され、実践に移されている。

本研究の目的は、大学入学後から大学・教育現場往還型教育を受けて卒業する大学生を対象にその効果を質問紙により測定し、課題を検討することである。

II. 方法

（1）対象　岐阜大学教育学部を卒業直前の４年生。平成 19 年度卒業生 190 名、平成 20 年度卒業生 167 名、延べ 357 名。

(2) 実施時期　2008 年３月と 2009 年３月。

(3) 手続き　ACT プランと呼ばれる大学・教育現場往還型カリキュラムは、大学１年次に２単位分(必修)、２年次に小学校１週間、中学校１週間(選択)、３年次に教育実習（４週間 or８週間)、４年次に毎週１回通年(選択)と教育現場に出向き、教育を実践的に学び、それを大学に持ち帰って吟味するカリキュラムである。毎年卒業間近の３月に大学教員に依頼して卒業生に対する質問紙調査を行った。回収は学部の学務係の回収 Box にマークカードと自由記述用紙を自主的に入れてもらった。

(4)質問項目　１年次から４年次までの学年毎のカリキュラムに対する効果を測定する項目に対して、1 全く当てはまらない　2 あまり当てはまらない　3 どちらともいえない　4 少し当てはまる　5 非常に当てはまる、の５段階で評定を求めた。今回は学士力や教師力との関連で『大学４年間で向上した力』9 項目の内容を報告する。

III. 結果と考察

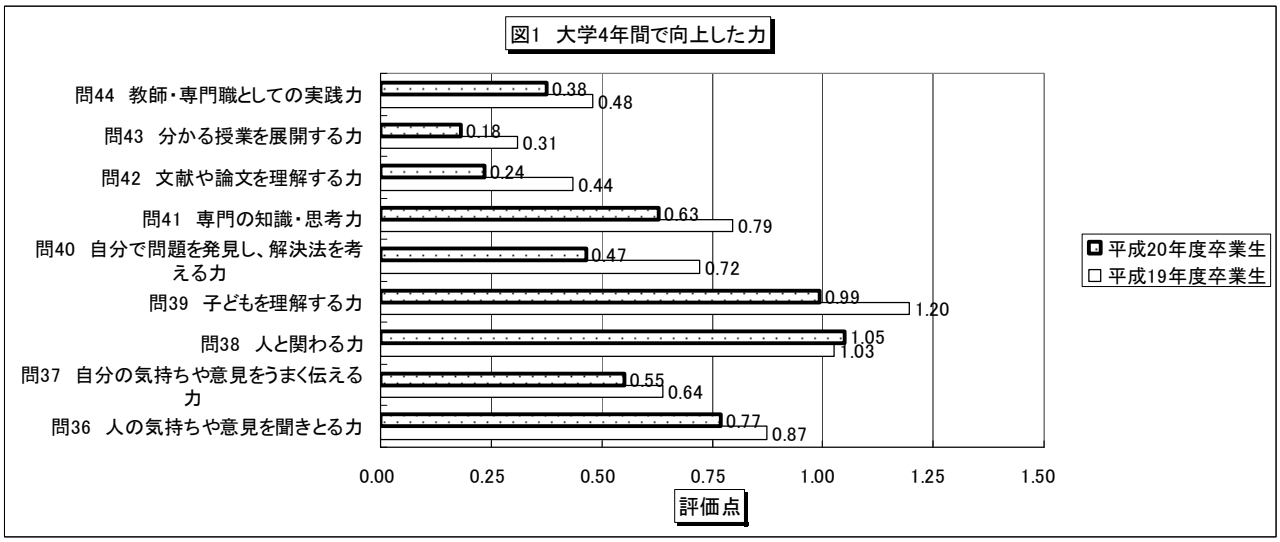
５つの選択肢に対して-2 から+2 点を与え、回答者全員の平均を求め、図１に示した。従ってマイナスは否定的回答、プラスが望ましい効果があると認知していることになる。

「子どもを理解する力」「人と関わる力」の２項目は１を越えており、かなり『大学４年間で向上した』と認知している。「専門の知識・思考力」「自分で問題を発見し、解決法を考える力」「自分の気持ちや意見をうまく伝える力」「人の気持ちや意見を聞きとる力」の４項目は 0.5 を越えており、ある程度『大学４年間で向上した』と認知している。「文献や論文を理解する力」「分かる授業を展開する力」「教師・専門職としての実践力」の３項目はプラスではあるが、0.5 に至らず、十分な教育効果であるとは満足できない値である。

平成 20 年度卒業生は全般的に平成 19 年度卒業生よりも低得点であった。２つの群の優越率を検討すると、９項目中４項目で、信頼区間の下限が 0.5 を上回っており、平成 20 年度卒業生は全般的に平成 19 年度卒業生よりも低得点であと解釈できる。残る５項目は優越しているかは明確ではなかった。

表１　教員志望の進路変更

	教師から教師へ	その他からその他へ	その他から教師へ	教師からその他へ	計
平成 19 年度	91	18	13	7	129
平成 20 年度	69	21	18	15	123
計	160	39	31	22	252

表１は教員志望が４年間でどのように変容したかを表７に示した。

(MIYAMOTO, Masakazu)